

6. 人とのかかわり調査の結果

6.1 景観

6.1.1 評価に用いた資料

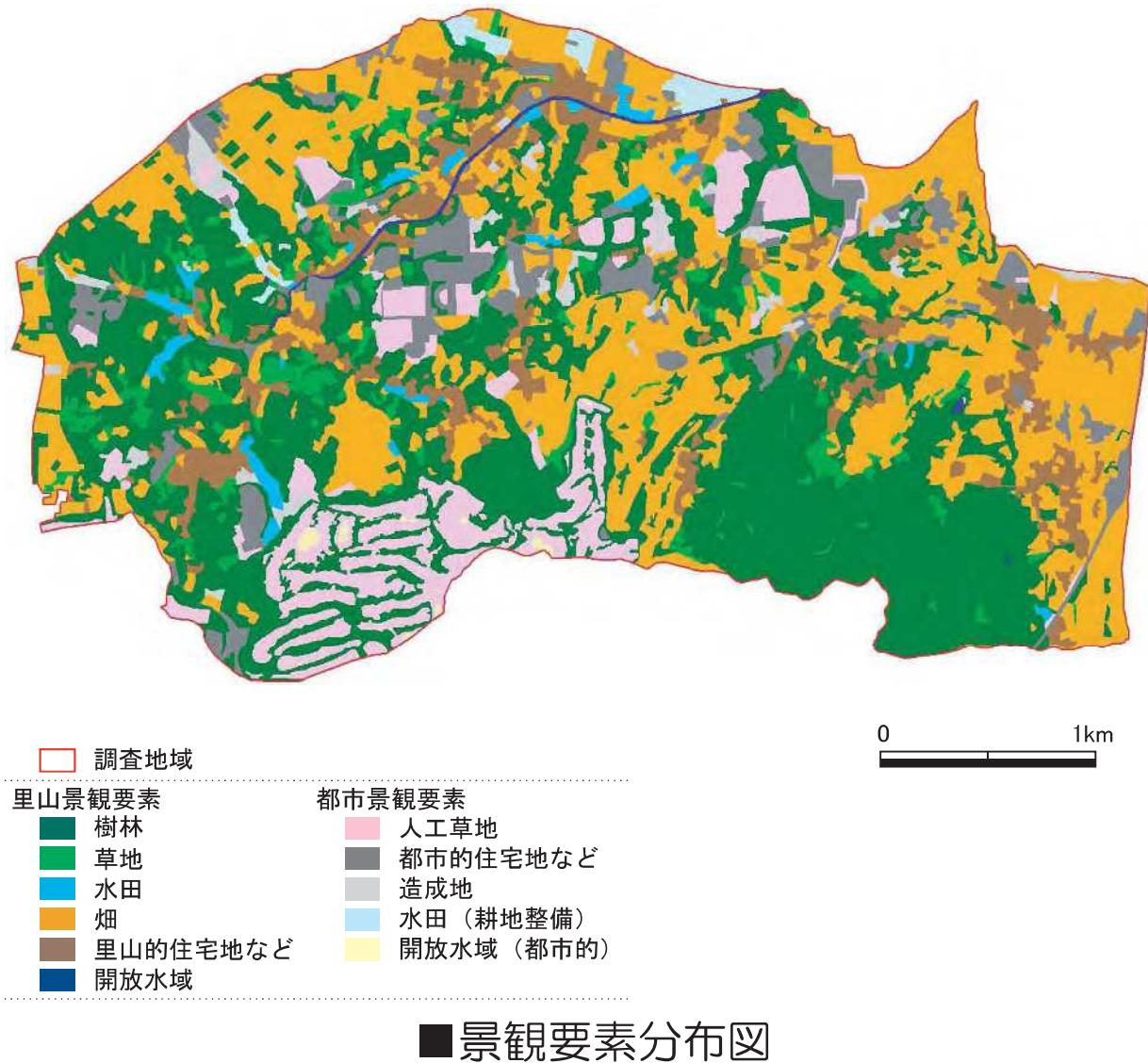
評価のために収集、整理した資料は、次のとおりです。

- ・植生図（平成16年度 平塚市作成）
- ・国土地理院地形図（昭和47年、平成14年作成 2万5千分の1図）

6.1.2 景観要素の分布

西部丘陵地域の現在の姿を景観要素分布図にあらわしました。この地域は、現在でも昔からみられた樹林、農地、集落がそろった里山的な景観が多く残されています。しかし、近年になって新たな宅地開発やゴルフ場の建設、大学の建設などが進められ、里山とは異質な景観がみられるようになった箇所もあります。

里山と都市景観要素に区分した景観要素区分図を次のページに示しました。





□ 調査地域
■ 里山景観要素
■ 都市景観要素

0 1km

■景観要素区分図



集落と水田 2005年9月17日撮影



新しい住宅地 2005年12月2日撮影



里山と畑地 2005年9月17日撮影



ゴルフ場 2005年9月17日撮影

▲ 里山的景観の例

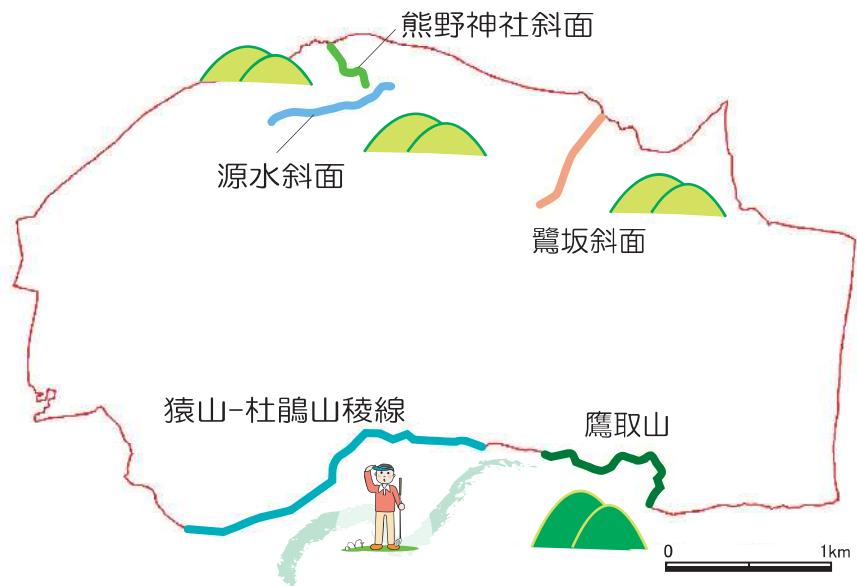
▲ 都市的景観の例

6.1.3 主要な尾根（ランドマーク）

【ランドマークとなる地形の選定】

遠くからまとまりのある樹林をみることができ、地域の象徴となる地形（ランドマーク）は、景観要素として高い価値を持ちます。地形図をもとに、周囲より標高が高く、樹林が連続しているという条件から選定した結果、鷹取山、および鷹取山の西から七国峠へと続く稜線（猿山-杜鵑山（さるやま-とけんやま）稜線）、金目川沿いの段丘斜面の3つの尾根（熊野神社斜面、源水斜面、鷺坂斜面）が、西部丘陵地域のランドマークとしてあげられました。

これらの尾根は、市内の広い範囲から眺めることができます、西部丘陵地域の里山景観のシンボルとなっています。



■選定したランドマーク

【ランドマークを眺められる範囲】

市内の各所から、西部丘陵地域の主要な眺望対象を眺めることができる領域を次のページの緑色で示しました。この領域は、国土地理院の「数値地図50mメッシュ(標高)」から算出したものであり、丈の高い建物がある場合には、みえない場合もあります。

標高が高い鷹取山の稜線は、市内の大半の範囲から眺めることができます、地域でもっともシンボルとなりやすい対象といえます。このような眺望対象は、それが存在する地区だけでなく、それをみることができる広い範囲の地区に対して、景観構成要素としての価値を持ちます。

ランドマークにちなんだ地名とその由来

○猿山（さるやま）

レイクウッドゴルフ場ができる以前、字猿山にあった山です。地名の由来ははっきりしませんが、猿が生息していたのかもしれません。また、アイヌ語で疎林や泥湿地のことを、「サル」と呼び、遠い山を指すともいわれています。

○源水（げんずい）

文字どおり湧き水が出たことに由来します。今でも水神様が祀られています。

○鷺坂山（さぎさかやま）

字鷺坂山に、標高86mの山があります。近くの湿田に鷺が飛来し、営巣していたと思われます。



源水の水神
2004年10月21日撮影



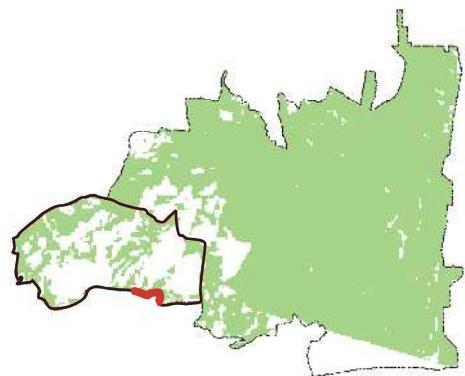
コサギ

鷹取山

鷹取山（標高219m）は、市内の多くの場所から眺めることができます。ただし、西部丘陵地域内からは、手前の尾根に遮られ、みえない地域が多くなっています。

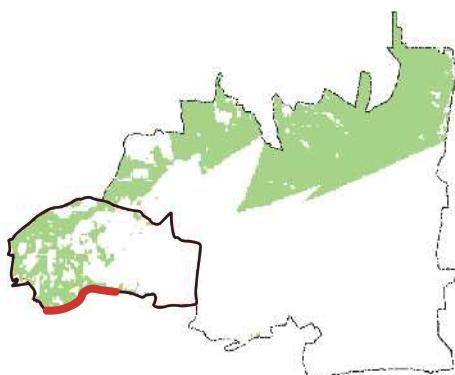


2005年4月28日撮影



猿山-杜鵑山稜線

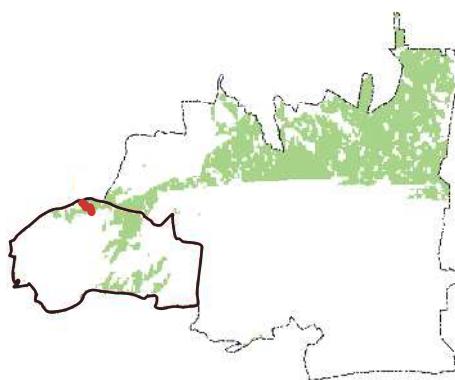
現在ゴルフ場となっている尾根で、市内の西部から北部にかけて眺めることができます。土屋靈園の高台からみると、クラブハウスや樹林や芝生の斜面を眺めることができます。



2005年9月17日撮影

熊野神社斜面

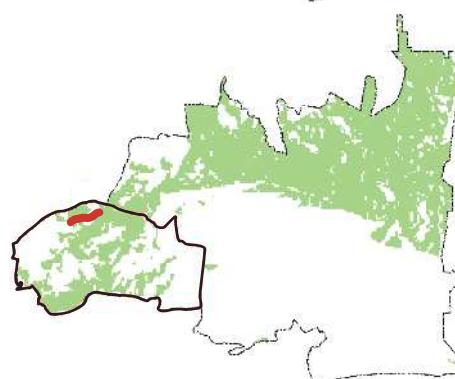
金目川の段丘斜面で、標高50m～60mほどの低い尾根です。斜面は北東向きで市内の北部の広い範囲から眺めることができます。



2005年9月17日撮影

源水斜面

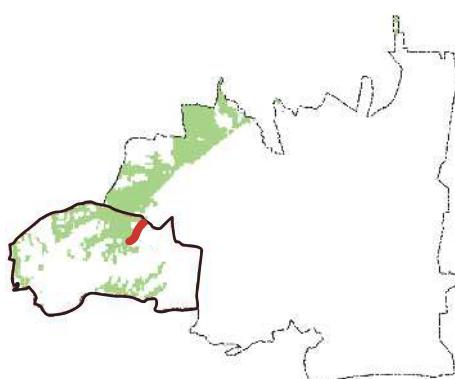
金目川の段丘斜面で、標高は80mほどですが、市内の東部、北部および西部丘陵地域内の広い範囲から眺めることができます。



2005年4月28日撮影

鶯坂斜面

金目川の段丘斜面で、市内西部や北西部の地域から眺めることができます。



2005年9月17日撮影

6.1.4 周辺地域の都市的な景観

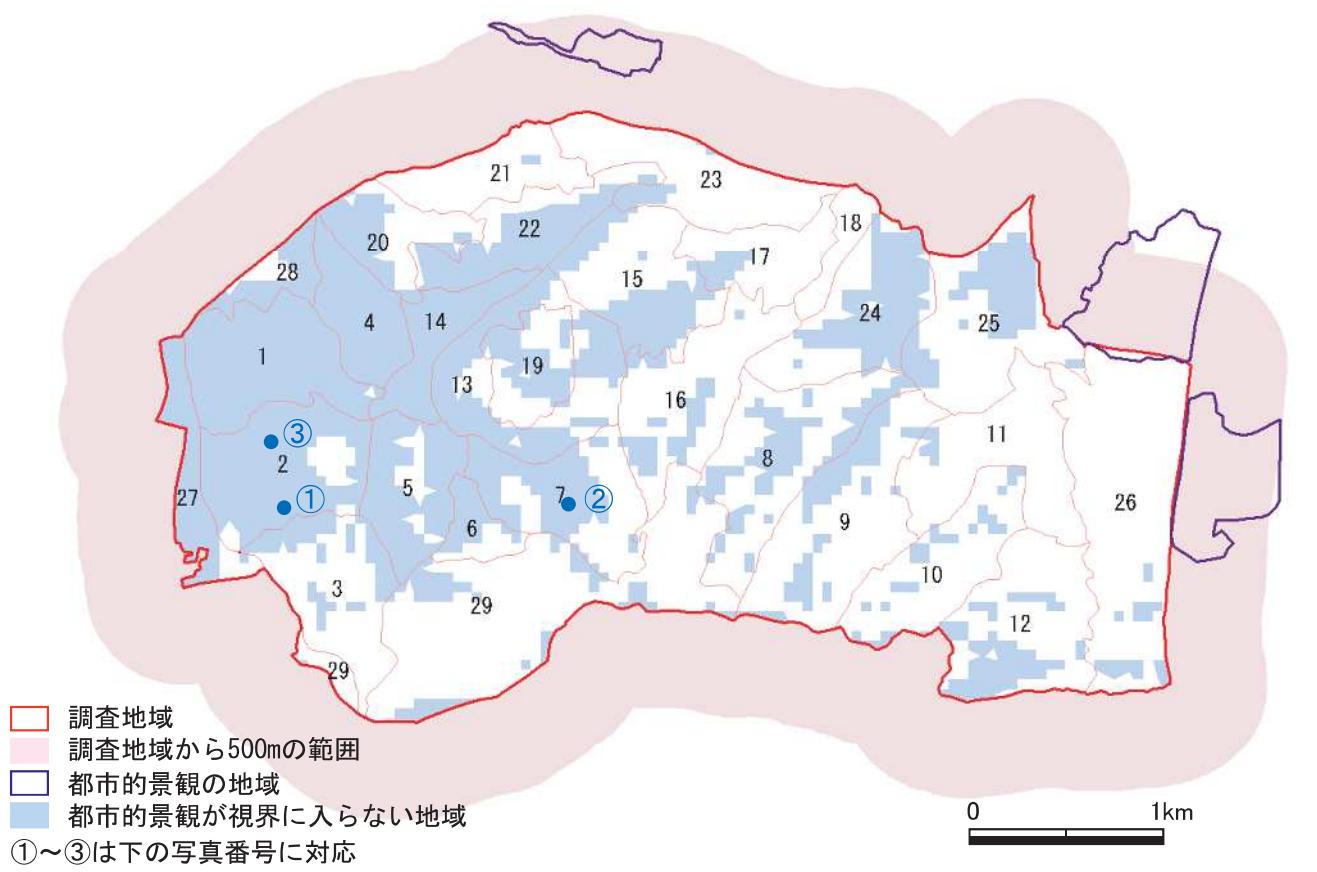
西部丘陵地域の外側500mの範囲で、大規模に住宅地がまとまっている地域を抽出しました。

これらの場所は、西部丘陵地域をとりまく、大規模な都市景観要素として、地域内にいても視界に入る可能性があります。

これらの、大規模な住宅地がみえない領域を、国土地理院の「数値地図50mメッシュ(標高)」^{*10}を用いて算出して示したものを、下図に示しました。

奥まった位置にあり、谷戸が入り組む愛宕山一帯などでは、地域外の都市景観要素が視野に入ることがほとんどありません。一方、座禅川や不動川沿いの低地では、ここから見上げる位置に住宅地があるので視野に入れます。

■地域外の都市景観要素が視界に入らない範囲



■地域外の都市景観要素が視界に入らない地点の例



①愛宕神社裏からの眺望
2005年9月17日撮影



②琵琶の水田と集落
2005年9月17日撮影

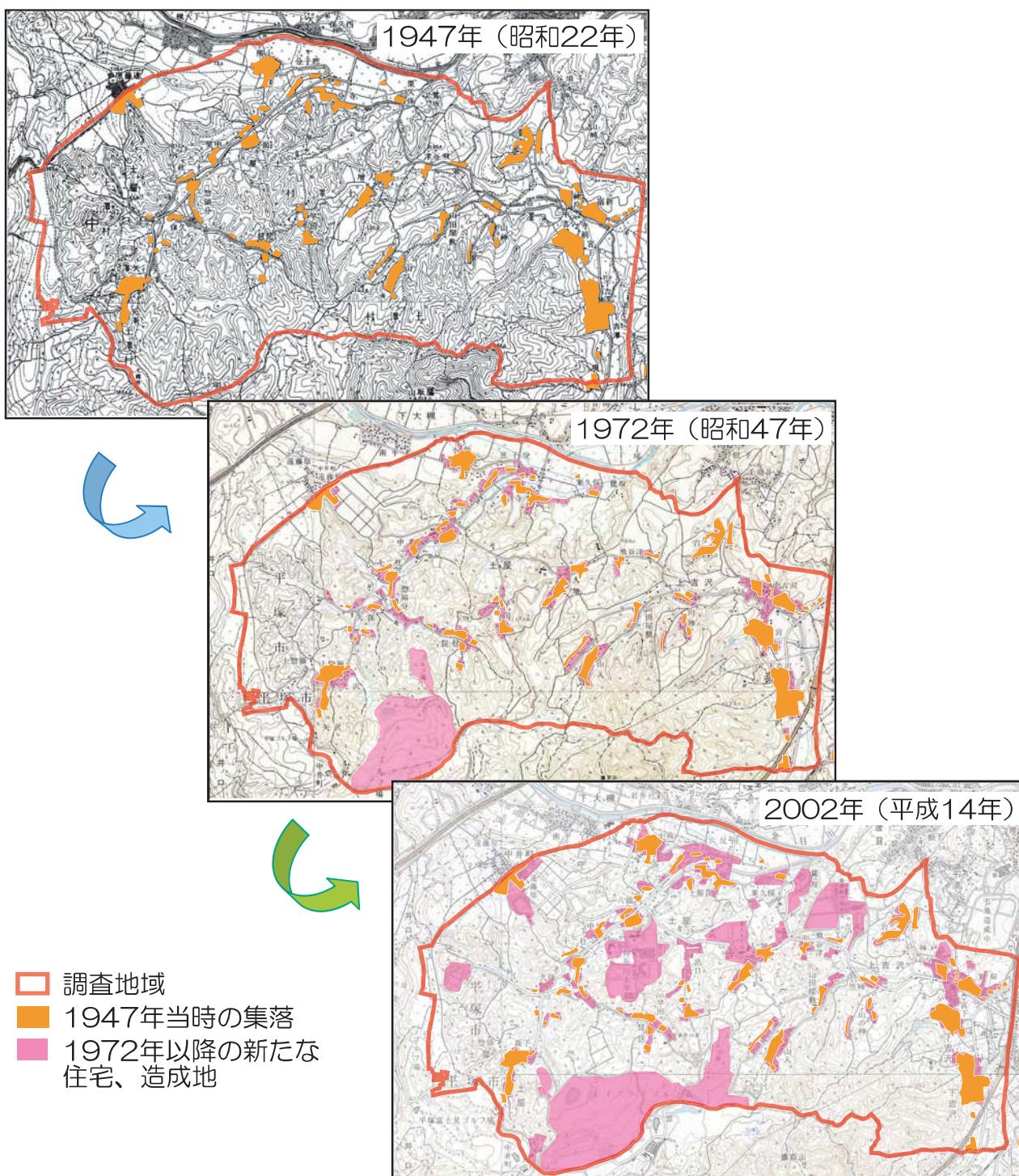


③愛宕下の谷戸
2005年9月17日撮影

調査地域内の土地利用の変遷

過去から現在に至る土地利用の変遷をみるために、1947年（昭和22年）、1972年（昭和47年）、2002年（平成14年）の、西部丘陵地域の地形図を並べました。

1947年と1972年をくらべると、新たにゴルフ場が造成され、高速道路が建設されていますが、集落の大きさや農地にはさほどの変化はありません。しかし、高度経済成長時代をはさんだ1972年と2002年をくらべると、新しい住宅地や研究施設、大学が建設されるなど、大きく変化していることがわかります。



*10 数値地図50mメッシュ(標高)：2万5千分の1地形図の等高線から計測・計算し、求めた数値標高モデルです。収録されているデータは標高のみで、道路や行政界などは含まれません。